

書誌コントロールにおける書評

菊池しづ子

I. はじめに

書評について従来論じられてきたものは、その多くが、書評を文芸批評のひとつあるいはひとつの文学ジャンルとしてとらえるもので、大まかに分ければ、1. 書物について語るということに関する文学的思索、2. 書評の質やレベルやスタイルについて論じるもの、3. 書評誌の内容や文芸批評世界での役割について論じたもの、である。しかもそれらは、論述的なものは極めて少なく、エッセイか、もっと軽く雑文や雑談といったものがほとんどであった。

言い換えると、書評についてにしろ書評誌紙についてにしろ書かれたものは一種の読書論であって、図書とか本と言わずに書物と呼んでいるものが大多数であることからもうかがえるように、かなり情緒的、文学的な偏りが見られるし、図書と評者との関係、評者による図書の読み取り方、評者の表現のあり方が多く扱われる。書評がジャーナリズムのなかでないがしろにされていることが批判される場合でも、“1冊の本を中心にして2人の専門家があいさつを交わしているようなものである。これでは肝心の読者がまるで無視されたことになる。・・・書評も文学の1分野を占め得るように立派なものに成長しなければならない。”といった指摘がなされるのである。

しかし、河井の紹介する欧米の書評論のなかには、

“美の哲学を探究する文芸批評と新刊書を読者に結びつける書評は、外見は類似しているが、本質においてまったく別の目的を持つものである。・・・文芸批評は「文学の名作の中でのわが魂の遍歴」であり、書評は「一著者の著作の非個人的考察」だ²⁾”との説がでてくる。非個人的考察だ、などと言われたら、ほとんどの文芸評論家は書評から手を引いてしまうだろうが、これはアメリカの図書館員のための図書選択論で書かれていることなのである。図書館における選択についてはここでは扱わないが、さしあたってこれを取り上げたのは、選択のための情報源としての書評という発想が、批評家など書く側の意識に薄い、ということを示すためである。また、ひとくちに書評といっても、それに対する捉え方には立場によって随分隔たりがあるということである。

本来書評には、出版流通のなかでいかに図書（商品）の情報を読者（消費者）に届けて選んでもらうか、という目的があるはずだし、実際読む側では読もうか読ままいかという判断の材料として書評を読むことが多いはずなのだが、多くの書評論ではこの側面は取り上げられない。というのも、文学だから、批評だからこそ、書評は片手間仕事ではない、とか、書評家をちゃんと育てるべきだといった議論になるのであって、情報の潤滑な提供、では批評家の議論の対象にはならない。

読者の立場から文芸批評的なものに対して立花は、私的なスタイルの読書日記の類に身辺雑記的なことが書いてあるとイライラして飛ばして読むとか、長文の書評はうるさすぎると述べている。そして買う買わないは自分で手にとって判断するから必要なのは最小限の情報でよい、書評に批評は求めない、と断言するが³³⁾、それは書評を図書選択の情報源という機能から捉えれば当然あり得る意見だといえよう。

Ⅱ. 書誌コントロールと書評

読者の側からの図書選択の情報源としての書評という面が書く側に欠落していると述べたが、作家や文芸評論家に加えて出版者にも不足しているのは、文献が書かれ、出版され、商品として流通し、購入され、保存され、蓄積され、検索手段が施され、読者に供される、という文献世界の全体からの視点なのである。この書誌コントロールという視点から書評を見直すとしたらどのような捉え方が出来るのだろうか。

書誌コントロールの最終目的は利用者と資料を結びつけ、利用者が望むようなアクセスを可能にすることである。そのために資料を同定し、記述し、主題分析を行い、検索手段を講ずる。情報検索技術は、利用者の望むもののみをそして望むものすべてを（only and all）検索できることを目指して開発されてきたが、主題について検索する、というシステムは利用者のニーズの一部分を充たすことしかできない。利用者が資料を選ぶに際しては、書誌情報や件名以外のさまざまな情報が必要である。実物に触れることによるブラウジングが大切であることはもちろんであるが、本来実物ではなく実物を記述したものの流通システムである書誌コントロールにおいても、そういった情報が提供されることが必要である。そのために、書誌コントロールにおいては、資料に含まれるabstracts や目次などの情報、更に記述のタイプ（概説的、理論的、統計的）など価値判断を含まない範囲での付加的な情報を含めることがしばしばおこなわれる。しかし利用者が最も欲しているのは価値判断、それは一般的な評価だけでなく、自分にとって適切かどうかという判断である。もちろん人間はそれぞれがすべて異なり、刻々と変化する存在だから最終的に取捨は利用者本人がなんとか判断するしかない。しかしそのために必要な情報を提供することはもっと考えられるべきである。商品としての出版物な

らその宣伝文も、またすでに読んだ人々による種々多様な書評（紹介や批評、評価）に関する情報が、利用者が望むなら書誌コントロールのなかでアクセスできるしくみが必要だと考えられる。

文献世界のなかで図書だけをとってみると、現在わが国では民間出版物だけで年間7万4千点余の新刊図書が出版され、62万点強の図書が新刊で入手できる状態にある⁵⁾。人が一生に読める図書の量は当然限られているから、読者はそのなかから自分の読む図書を選ばざるを得ない。効率よく選ぶために読者にとっては、あらゆる図書の現物が提示され、それらを眺め、手に取り、中をめぐってみられることが望ましい。それだけではなく、その際、その本は面白いから読んでごらん、その本はあなたにぴったりですよ、とささやく声が聞こえることが必要である。つまり、すべての図書が提示されること、ブラウジングできること、自分にふさわしい価値判断のための情報が提示されることが読者にとって必要なのである。そこで、本論では、このうちこういった価値判断のための情報のひとつとしての書評が書誌コントロール上でどのような状況にあるか、ということについて、わが国の図書の世界に限って、整理しておきたい。

私は、ここでは図書館における図書選択の過程における書評の役割については扱わない。もちろん図書館における資料の選択において書評の果たす役割は大きいから、河井が紹介しているように多くの議論があるし、また実際の書評に対して選択の立場からおおいに不満があることも事実である。しかし、一定の予算に基づいて、不特定多数の利用者に対して最適のコレクションを継続的に作り上げてゆかねばならない公共図書館における資料選択と、個々人における、どの本を読もうか、という選択とは質も次元も異なるものである。図書館は、利用者＝読者に対して、“出版市場のなかでそれぞれの館のお勧めのサンプルをおいたショーウィンドーのようなもの⁶⁾”であるから、図書館のコレクションは、一種の選定図書リストとして読者に提示されるものだと考えられる。そしてサンプル図書リストは、書評の延長上に、読者の図書選択のための情報源として位置づけられるからである。

なお、図書選択の最も有効な手がかりである引用（テキストの文脈においてふれていること）は、本論では扱わず、専ら書評として書かれるものだけをとりあげる。また、テレビ、ラジオなどの非文字的メディアによる書評も含めない。

Ⅲ. 書誌コントロールの手段としての書評の種類

読者がすべての図書を提示され、手にとって、中を見て、読むべきかどうかの情報を得る、という流れに沿って必要なツールを挙げると次のようなものが考えられる。

（１）価値判断拔きの図書リスト

①網羅的な書誌：日本全国書誌、種々の新刊情報、在庫情報

網羅的に図書の実物が提示されるという場は現実にはない。国立国会図書館に行ったところで全資料を一望することは出来ないし、大きな書店に行ってもすべての図書が揃っているわけではない。さらに、人はたとえ100万冊の図書を並べられても、ブラウジングできるものは体力的にも知的にもその一部に限られる。だからすべての図書を並べた図書館や書店は理念上必要だが、あったとしても、実際には網羅的な書誌の無味乾燥なページを眺めるのとは全く異なるが、とはいえそれだけで本を選ぶのは困難だし、そんな図書館や書店に行けるのは一部の地域の人々に限られてしまう。

網羅的な書誌の本来の意義は、すべての出版物を同定し、記録するということであって、これが書誌コントロールの根幹となる。しかし、現実にはこの目録作業はかなりずさんである。

出版する側では商品としての図書の情報をできるだけ迅速に手軽に提供するために、『これから出る本』、廃刊になった『ウィークリー出版情報』、などの新刊情報誌を出しており、図書館は積極的に収集してチェックするが、一般読者が継続的に見ることはあまりない。

現在民間で販売されている（購入できる）図書のリストは従来印刷体では『日本書籍総目録』で、このインターネット版が「Books.or.jp」である。これは一種の全国書誌（販売書誌）だが、それだけでは図書は入手できないから、主要なインターネット書店にリンクすることで、検索した図書をすぐ購入できるようになっている。

このような書誌のデータベース化は検索上便利だが、逆に、一覧性を欠くという大きな弱点をもっている。つまり始めから最後まですべてをずーっと見てゆくということが出来ない。先にすべて並んでいても多すぎると選ぶのは難しい、と述べたが、すべての集合はブラックボックスで、何らかの検索の結果しか出てこないのと、すべてがそこに並べて見えるようにしてあるのでは全く違う。現在多くの書誌索引類がデータベース化され、そして検索をしないと何も見られないし、一覧してみることができない（できるシステムもあるが、わが国の多く検索システムは限られた機能しか持たない）というのは、本来われわれが図書を見て選ぶ、という行動のうちの半分だけに目を向けて作られている、という見方もできるだろう。

②数の多い解題つき選択書誌：選定図書目録 図書館のコレクション

価値判断のない選択はありえないが、非常に緩やかな選択の上で、価値判断そのものの情報を提供していない、という点でここに挙げた。

解題というのは一応書評と区別されるが、本論では選択の手がかりとなる情報で書誌データ以上のものは含めて考えようとしているので、ここに含めている。書評と解題

(annotation) は区別されており、解題は一般に比較的短文のもので図書の内容を要約・紹介するもので、書評は図書の内容に深く立ち入り、内容を解説し、批判したり評価したりするものと言われているが、内容的に見るとその違いは曖昧だといわれる。

“・・・かくてブラウンは書評を書評たらしめる条件は価値判断であるとし、単なる新刊紹介と区別するのである⁹⁾。” が、実際には解題にも長文のもの、内容の評価を含めたものが、特に専門分野の文献解題には多々見られる。ただし専門分野の文献解題や名著解題は読者が読みたい図書を選ぶためというよりは、古典に関する知識を得るために使われることが多いといえよう。ここでは評価のない簡単な内容紹介という意味で使っている。

日本図書館協会の選定図書は、膨大な出版物の中からその10分の1強を選ぶ作業だから、その選択はかなり大雑把で、出版形態など外的要素に惑わされることが多いし、質のよい図書でも公共図書館向きでない図書（専門的すぎる内容のもの）は除かれるから、人によっては納得できない選定となる。解題は1点につき100字以下なので、ほとんど役に立たない。インターネット書店で出てくる内容案内のほうがずっと情報量が多い。個人にとっては使えないものだし、図書館が選書ツールに使うには信頼性が低い。

先に述べたように、公共図書館のコレクションは一種の選択図書リストの見本である。ブラウジングできるから、なかの目次やレイアウトがわかるし、少し読んでみることも出来る。そういう意味で、評価がついていない（面白いかどうかは自分で判断しなければならない）というところから解題付き書誌の現物版といったものである。市区町村立図書館の年間購入図書は一館あたり3000冊から1万冊くらいはあろうから、選択されているとはいえ非常に多いので見本としては膨大だが、時間をかければ一つ一つチェックしてゆくことも不可能ではない。なんといっても商業出版物以外の出版物も含め、絶版図書もバックナンバーも現物で見られる場はほとんど図書館しかないのだから、図書館におけるコレクション作りは出版物の流通と利用という流れのなかできわめて重要である。ただし現在の公共図書館はあまりにもレベルの差が大きすぎて、それぞれの選択に対する信頼性にも大きな差がある。もうひとつの問題点は、図書館の蔵書は常に貸し出し中のものが多く、話題の図書や新しい図書はほとんど実際には書架にないので、ディスプレイとしては非常に不満足なものになっているということである。

上記の①②は、数が多く、評価、価値判断のつかない書評（解題）つきのリストである。次に本来の意味での書評のメディアを挙げる。専門分野のもの、たとえば学会誌に載る書評は除外し、一般向きのものに限っている。

（２）書評付きの選ばれた図書

①新聞書評（一般紙）

廃刊となった『書評年報』の最後の2000年版によれば、朝日、毎日、読売、日経各紙は年間およそ350点前後の書評を掲載している。新聞の書評は最もメジャーな書評メディアであるが、その割に点数は少ない。出版される図書の200分の1しか書評で取り上げてもらえないのだからこれは載るだけでステイタスとなろう。なぜ新聞の書評が重視されるのか、それはもちろん発行部数のゆえである。2003年版の『新聞総覧』によれば、朝日830万、毎日397万、読売1017万、日経306万、産経203万（千以下切り捨て）とある。毎日1000万部売れる超ベストセラーと考えると仰天してしまう。

しかし、新聞は読者がみずから選んで購入する図書とは全く異なる読み方をされることに注意が必要である。まず新聞は宅配されるから、人によって、日によっては読む気もないのに購入していることになる。読む気があっても書評欄を読む購読者がどのくらいいるだろうか。多くの人は、なんとなく一応とっているか、一面、スポーツ、株などいくつかの紙面に目を通すだけだろう。とはいえ1000万部ともなれば、1部を1人だけが読み、100人に1人が書評を読むとしても10万人だから、書店では主要新聞の書評に載ったものは必ず客から要求があるものとして毎日チェックして対処しなければならない。

“公共図書館では、新聞書評に載った本は必ずといっていいほど利用者からの要求があり無条件にその本を受け入れざるを得ない現実がある”という否定的なコメントに対しては、多くの図書館員が批判するであろうが⁷⁾、私は利用者の要求を無条件に受け入れるということよりもむしろ、新聞書評に載った図書は必ず要求されるということに対する懐疑ととればうなずけるところもあると思う。それは数人あるいは数十人程度の人々によって選ばれた（学芸部がおおよそ選び、書評委員が更に選ぶなど）たった350点ほどの図書が、1000万部という強大な力を持った新聞によって、「読むに値する本」として、他の選書手段にほとんど接することのない読者に提示されている、という過程に対する懐疑なのである。

新聞の書評はだいたい日曜に見開き2面を占めるのが一般的である。そこに収まる程度が一般の読者が継続的に疲れずに読める量でもあるのだろう。新聞の書評は1931年に始まるという⁸⁾。新聞になぜ書評が載るようになったかということについては調べていないが、かつては新聞は大多数の人々に日々提供される文字情報源として唯一に近いものであったこと、同じ出版ジャーナリズムの世界のものととして出版情報は新聞において重きを置かれていること（当時の朝日新聞の朝刊の一面は出版広告である）、読書というのは文化欄を埋めるひとつのジャンルである、といったことが理由であろう。

新聞の書評は、書評誌紙に比べ、圧倒的に多数の読者に対してということから、より読者を意識した、また多くの人にとって読みやすい理解しやすい内容のものとなっている。また、書評だけでは読者が限られるし、読み物として面白くなければ読まれな

くなるので、どの新聞もさまざまな企画を取り入れる。時宜に合ったテーマで関連図書を複数取り上げて紹介したり、著者の紹介をしたりする。特に人気作家を取り上げてどんな作品があってどの作品がお勧めかといったことについて読者の意見を交えて紹介するといったやりかたは、書評家の一方的な評価の押し付けだけでなく、広く一般の読者がどう読んでいるかという意見を提供するものとなっている。

新聞の書評として異色だったのは、1988年5月から産経新聞が毎日夕刊見開き2面を書評で埋めたことであった。これが多くの読者に喜ばれたかどうかはわからないが、新聞業界ではかなり話題になったようである⁹⁾。ただ、新聞そのものを論ずる書評というのは専門誌以外であまり目にするのがないし、またたいていの人とは同じ新聞を習慣で取り続けるので他紙を購読している一般の人々はあまり気がつかなかったようである。私個人にとっては、いわゆる書評以外の企画も多かったし、毎日読むところがいっぱいあって随分得をした気がしたものである。また一般に新聞では行われなようなとんでもない論戦が繰り広げられて非常に刺激的で面白かった。尤もそうになると新聞の書評というより書評誌紙上の批評のような性格をもつようになったともいえる。ただ毎日のことなので、リアルタイムで論戦が行われている感じがしたし、そしてなによりも買い忘れなどなく毎日届けられる、というところが魅力であった。1993年にこの紙面づくりは終わり、逆にひどい手抜きの日刊が作られるようになり、私事になるが、あまりにばかばかしいので購読をやめた。

新聞の書評の有効性は、読者が自ら求めなくても毎日（書評は毎週）手元に届けられること、部数の巨大さによる浸透性であろう。他の手段は自宅でパソコンに向かうにしても図書館に出かけるにしても、読者が自ら求める労力を払わなければ書評自体にアクセスすることができない。新聞だと、手元に届いたものを読者が読むか否かだけなのである。

②一般誌の書評

新聞と同じように『書評年報』2000年版によれば、年間の点数は週刊誌では、エコノミスト180、サンデー毎日200、週刊朝日150、週刊金曜日50、週刊東洋経済170、日本経済研究センター会報42、月刊総合誌では、潮61、現代61、自由8、状況11、新潮45が37、太陽10、中央公論60、婦人公論99、文芸春秋71、となっている。雑誌の選定自体が随分恣意的に思われるが、そのことはおいておいて、総合誌の書評数は大体年間50から100点くらいが標準的なところだろう。週刊誌、月刊誌とも毎号5点くらいずつ取り上げている。数から言ってかなり選択されたものだから、選択の手がかりとしてはそのつもりで見なければならない。

雑誌は、新聞と異なり、銀行や床屋などに置いてあるもの以外はその都度購入する読

者が多い。雑誌の個人による予約購読は一般誌においては、わが国ではそれほど多数派ではない。特に週刊誌では一番売り上げの多いのが駅の売店だということに示されるように、読者は気の向いたときに買うことが多い。読者は雑誌を買ったからといって書評を読むとは限らないが、新聞よりは高い率で読まれているだろう。しかしいつとき『マリ・クレール』の書評が話題になったが、いくら書評が評判でも書評だけのために『マリ・クレール』を買う、という人はめったにいないわけで、実際私もつつい買いそびれた。雑誌の場合発売日を知っていて意識していないとたいい買い損なってしまう。また、女性誌は短命なものと決めてかかっている公共図書館ではせいぜい5年分くらいしか保存していないし、『マリ・クレール』の書評は『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』でしか検索することが出来ない。雑誌の書評はわざわざ検索して探して読むのではなく、ふつうはついでに読むものだから、雑誌の一般的なイメージと書評の内容のミスマッチは話題になったとしても、読者と図書を結びつけるという本来の機能はあまり果たしえない。さらについでに読むという傾向が強いほど、最終的に書評された図書を入手して読むということにつながりにくい。日曜の新聞の書評面はゆっくりお茶を飲みながら目を通し、時にはメモを取る読者が少数ではあれ確実に存在するのに対し、雑誌は持ち歩いたり、乗り物の中で読んだりするし、図書と違って捨てることに抵抗が少ないので、あとで、なんとかいう本の紹介をどこかの雑誌でいつだか読んだような気がするが、はてどこだっただろう、そういえば新幹線の中で読んで、降りるとき駅で捨ててしまったのだ、というような扱いになることが多いのである。つまり、雑誌の書評は斜め読みして読み捨てられる可能性が高いので、実質的には短期間で消滅してしまうような性格のものになりがちである。

③書評誌紙

書評をメインにした雑誌類は、文芸批評的性格の強いものと、出版情報の提供に主眼を置いたものとおおよそ分けられる。文芸批評的性格の強いものの代表が、『図書新聞』、『週刊読書人』という新聞形態の週刊紙、思想性、党派性のそれほど強くないものとして『本の雑誌』(月刊)、などが挙げられる。出版情報的なものとしては、『出版ニュース』(旬刊)、さらに『ダ・ヴィンチ』(月刊)も含めておく。出版社のPR誌は少ないながら固定的ファンの多いジャンルだが、その内容はほとんどがエッセイなどの創作なので、ここではとりあげない。

『図書新聞』、『週刊読書人』についてはあちこちで言及されているが、次のような見方が平均的なものではないだろうか。

“・・・いつも不思議に思うのは両紙とも書評誌というよりは文化新聞というにおいが強いことである。これは、ブックレビューだけでは売れないという認識や、書評紙を

越えて文化的発言をしたいという編集者の願望によるのであろう。しかし書評欄は二の次で、あまり聞いたこともない評論家や学者の文章で、第一面その他が埋められているのでは、定期購読する気も起きなくなるだろう。書評新聞が本来の使命から離れて、新人登竜門か作家予備軍のメディアになっているのは、日本の書評界の現状をよく投影しているように思われる¹⁰⁾。”

書評は書かれて刊行されるのだから、当然それは読まれるためのものである。読者の読み方はおよそ二つ、それを文芸批評あるいは思想表現のひとつとして読むのか、自分が読むかどうかを決めるための判断材料とするために読むのか、である。『週刊読書人』や『図書新聞』のような書評紙において書評の重点はあきらかに前者であり、後者については、読者がそうしたければそういう読み方も出来るが、そういう役に立たなくても構わない、というスタンスであるように思われる。

両紙の目指すところは、岡村や香内を参考にまとめれば、書評というかたちをとった批評や論説を編集することによって、社会的、文化的に発言する場を作って、それをもって行う文化運動のメディアだということである。香内のいうある種の「知的共同体」のメディアとして、ある種の（思想的）運動紙として機能したいと願い、また一時期はそこそこそのような場であった¹¹⁾。

これら両紙はその思想的文化的コミュニティの外にいる者にとっては非常に排他性を感じさせられる強いイデオロギー性を持っている。1970年前後に『朝日ジャーナル』が思想的な「知的共同体」のシンボルとして多くの学生や時代にコミットしている人々に売れ、そして1984年に廃刊になった状況のなかで、両紙（かつて並び称された『日本読書新聞』は同じく1984年に廃刊になったが）はよく続いている。思うに、両紙は伝統ある書評紙である、という半面によって図書館などが購読し続けることで支えられているところがあるのだろう。しかし多分両紙はもう半分の面、つまりオピニオンリーダーとして存在したいのではないか。こういった性格からして、先にふれた日本図書館協会の選定図書リストが『週刊読書人』に掲載されるのは場違いな感じを抱かざるを得ない。このような書評紙が、書評紙という機能のみの存在になるべきかどうかといったことは、私の論ずるべきことではない。こと書誌コントロールという観点に限ってみれば、その役割は小さいということを指摘するだけである。

書評誌が思想誌という側面を持つのはなにもこの2紙に限ったことではない。小林によれば海外の書評紙でよく話題にされる *New York Times Book Review*（週刊）と *New York Review of Books*（隔週刊）を比べてみると、*New York Times Book Review*は年間2500点、まんべんなく各分野の図書を取り上げ、一般教養的で権威のある書評紙としての地位を守ってきた一方、*New York Review of Books*の方はずっと少

なく年間350点、その書評は独立した論文に相当するもので、「言論一般と所謂書評メディアを分離してしまわぬ編集方針」を堅持してきたという¹²⁾。

書評や書評誌はしばしば批判されたり論じられたりしながら、一方で新しい書評誌が創刊されるのだが、だいたいそういったものは長続きしないで、やはり同じように批判され廃刊になってしまう。

たとえば、「本」と「書評」にこだわった、わが国初のリテラリー・マガジン”と編集者が豪語する『季刊リテラール』が1992年夏に刊行されたが、創刊号の巻頭対談では対談者同士が「うん、わかるわかる」と言い合っている意味がわからない人に対しては入ってくるな、といわんばかりの雰囲気を漂わせ、それでいて編集者は売れないことや出版界の理不尽さへのうらみつらみを述べており、また一方では、書評なるものについて60人以上もの人が一言ずつ述べているというわけのわからない雑誌であった。もっともこれは創刊号だったからのようで、2号からはもうすこしわかりやすい書評誌になったが、結局18号で廃刊になり、別冊だけが続いている。その別冊は、“〇〇に関するベスト1000”といった読書案内ベストなんとか（後述）タイプである。またこの創刊号の対談で“ゴミみたいな雑誌”といわれた岩波書店の『よむ』（月刊）という書評誌も一般向けのやさしい書評誌を目指したようだが、1991年から1994年で廃刊になってしまった¹³⁾。

批評家からゴミといわれた『よむ』をさらにくだけた雰囲気にした書評誌である『ダ・ヴィンチ』は、1994年、ちょうど『よむ』が終刊を発表した頃に創刊された。若者向きに、また図書にうとい人へのガイドを目指した内容で、年間8000点ほど紹介するから、量的には（1）の②にあげた選択書誌、大きめの公共図書館1館の購入冊数に匹敵する。話題の図書の解説からお勧め本、著者インタビュー、新刊書のリストまで、とにかく図書に関することならなんでも盛りだくさんだが、わかりやすい、読むべき図書を紹介してくれる、話題をフォローできるということで、それなりの読者を持ち続けているのだろう。カラフル、イラスト入り、表紙は人気タレントというように極力読書をポピュラーなものに扱い、情報提供に徹し、学学的であることを避けているから、タイトルから言っても書評誌というより今沢山出されている情報誌のひとつと見たほうがよい。自分がインテリだと思っている人たちからはバカにされるだろうが、現代の若者の多くは岩波文庫を読破せねばとか、わからなくてもマルクスを読まなければといった知的プレッシャーを感じていないから、言い換えると「知的共同体」は以前よりずっと縮小してしまったから、面白くてそこそ役立てばいいと考えるのだろう。書評誌としては批評家たちからは無視される存在でも、図書の流通と選択の流れのなかでは内容量からいっても一定の役割を持つものと考えられる。

『出版ニュース』はこれらとは全く異なるもので、出版社が共同して出版している出版界のPR誌のようなものである。新刊書のリストが載るという意味では販売書誌を兼ねているし、出版界の意見を代弁して、たとえば再販価格維持制度の存続を主張したりもする。書評は多くはないが、書評索引があり、地方出版物の紹介があるなど、出版情報誌としては独自の役割を果たしていると考えられる。

④読書案内的な書評つき選択リスト

これは独立した項目にすべきかどうか迷った。多くの、特に素人向けの書評誌、情報誌、読書案内本（『これ1冊で何々がわかる本』の類）には〇〇ベストテン、読むべき100冊、の類の記事がたくさんあるからである。つまりこのテーマ、このジャンルではこれがよい、これを勧める、これを読むべき、といった読書案内、類書案内である。従来の書評誌も別冊や特集号などでこのような企画をすることが多くなっているように思われる。

こういったものは、その分野になじみのない人、そのジャンルにこれから触れようとする人に役立つのはもちろん、その分野の愛好家に対しても、迷ったときの指針としてしばしば登場する。言うまでもないかもしれないが、こういったものの危険性は、勧められたものが誰にとってもいいとは限らない、出版者がそれを宣伝に使うこと、ベスト何某に入るものだけが注目され、他の佳作が目につきにくくなり、そして一部のものばかりが売れることで他のものが売れないことにより絶版などになりやすい、といったことである。読者はそういった情報に練られてしまい、自主的な選択を怠ることになる。たとえばフィクションのなかでは比較的評価がしやすく、作品が多く、また愛好者が多い、ということから、ミステリの世界ではベスト〇〇が毎年恒例になりつつある。そして『このミステリーがすごい』『週刊文春傑作ミステリー』など、競ってランキングを行い、ランクされた図書には「このミス第1位」といった宣伝が帯に書かれてつけられ、それによって売り上げが急増する、という回路ができあがってしまっている。一方で、後述するが、「amazon」の読者書評では、“「このミス」1位というから読んでみたらがっかり”といった意見がかなり出てくるから、やはり読書というのは個人差の大きいもので、ベストテンなど当てにならないのである。もっとも、このようなものを批判するのはたやすいが、これだけ多くの出版物の中で図書を選ぶのは個人にとっては非常に難しいことであり、そのような場合に、目安としてベストテンの類に頼りたくなってしまふのは、大方の人々にとって無理からぬことなのである。つまりこのようなものは明らかに需要があって存在しており、実際売れている。そしてこのようなベスト〇〇の類も元は書評家、評論家のお勧めの図書をランキング化したものであり（読者の投票によるものもあるが）、書評の延長上にあるものと考えられる。

(4) 情報満載の図書リスト：インターネット書店

完全に網羅的ではないが、現在購入できる図書は大体そろえているインターネット書店は、どの書店もすべてをではないが、つぎのような特徴を持っている。

- ① 実物を置かないで済むメリットを生かして入手可能なものをすべてあげていること。政府刊行物などを除き、市販されている図書はだいたい網羅されている。先に述べた「Books.or.jp」からリンクされているインターネット書店は、「ジュンク堂」、「amazon」、「クロネコヤマトのブックサービス」、「楽天ブックス」、「紀伊国屋書店」、「Boople」、「e-hon」、の7店である。
- ② 実際に見られないことを補うために、2次元の画面で出来る限りの情報を示そうとしていること。

最低限の情報として図書の表紙の帯つきの写真、書誌データ、価格まで。そのほか目次、出版社による内容紹介がつく書店もある。書店による推薦文のつくところもある。たいてい著者の紹介もある。インターネット書店であり同時に店舗を持っている「ジュンク堂」、「紀伊国屋書店」では、どの支店に在庫があるか、書店のなかのどこ（何階のどの書架）にあるかまで示している。データベースの欠点は一覧性に欠けることだと先に指摘したが、実際の書店をもっているところでは書架を眺めてブラウジングする、ということをパソコン上でやれるようにと、検索するのではなく書架上の図書を順にずらりと見ていけるようになっている。

- ③ リンクを張ることによって、多様な情報を提供すること。

検索された図書の主要新聞・雑誌に載った書評があればそれが示される。著作権のせいはまだ多くはなく、リストだけというものもある。不特定多数の読者の反応を読者の書評として示すこと。

- ⑤ 関連図書などの情報や推薦図書が提示されること。

もちろん関連図書といっても機械的に選ばれたものではあるが。ベスト〇〇関係の情報も、最近話題の図書も、さまざまな情報がリンクされて提供される。

以上のことからわかるように、インターネット書店は、網羅書誌データ、解題と書評を包括的に取り込んだ書誌であり目録なのである。リンク機能と、匿名の多くの人々の発言が取り込めるというインターネットの特徴によって、書誌と解題と書評（専門家と一般人とを含む）と書店の目録とが一体となった。

私が注目することのひとつは、書架を順にながめられる機能である。実際の書店を持っていない純ネット書店であっても、図書を図書館のように分類して並べてそれを示すことは可能である。確かに並べられるのは実際の図書ではないが、クリックすれば既述のようにむしろ書店や図書館でブラウジングしているときにはすぐには見られないさま

ざまな情報が出てくるから、実物を見ないとわかりにくい地図やイラストなどの画像をメインにした図書以外では、情報量に限っていえば実際に手にとって見るのに遜色ない、というよりそれ以上であろう。

次に、インターネット書店が導入したの最大の特徴であり読者への貢献は、読者の書評が読めるということだと私は思う。読者の書評または感想というのは、従来新聞雑誌の書評欄の読者投稿欄に少しだけ載る、しかも編集を経ているのでなんらか選ばれたものだけしか一般読者は見ることが出来なかった。読者が送り返す「読者カード」葉書を見るのは出版する側であって、読者ではなかった。しかし人が、面白い本ない？とか、○○という本は読んだ？どうだった？と周りの人に聞くのは図書を買う前に読む前にその本の内容や価値を知りたいからである。しかし聞いたところで読んでいない人では問題外だし、感性の近い人の評価でなければ自分にとって無意味である。ベスト○○や、お勧めの本100冊の類にしてもそういった要求にこたえるための標準的な情報の提供なのである。

一般向けの新聞や雑誌の書評のほとんどは“惜しむらくは云々”という程度であまりけなすことはしないし、当たり障りのない物足りないものである。また、いくら勧められても、自分と似た感性の人の意見でなければ参考にならないのが読書の世界であるが、見知らぬ他人の感想でも数が多くなればおよその傾向は見えてくるし、「amazon」の場合、レビューを書いた人のプロフィール（ほかにどんなレビューを書いているか）が一覧できるので、その人がどういう嗜好の人か少しはわかるしくみもある。こうして、じぶんと似た好みの方の意見を聞くという、従来最も得難かった情報がある程度得られるようになったというのはインターネットのおかげである。

毀誉褒貶の分かれるベストセラーを例にしてみよう。養老孟司著『バカの壁』は「楽天」で9件、「amazon」で207件のレビューが見られる（2003年12月24日現在）。どちらも星1個から5個まででお勧め度を示しているが、

楽天では、☆☆☆☆☆ 2名、☆☆☆☆ 4名、☆☆☆ 0名 ☆☆ 2名、☆ 1名
amazonではあまりに多いので最初の20件だけみると、

☆☆☆☆☆ 3名、☆☆☆☆ 1名、☆☆☆ 4名 ☆☆ 3名、☆ 9名

レビューアーのなかには、レビューを前もって見ればよかったそして買わなければよかったという人、低い評価のレビューが多かったけれど読んでよかったという人、さまざまである。ベストセラーに対しては、なぜそんなに売れるのか、という反発の分だけ評価が厳しくなる傾向もあるようだ。このようなレビューは、買う場合の参考にするためのものではなく、図書を読んで人と感想を語りあう楽しみをレビューを書くこと読むことで代用する、という機能をもつ。

Ⅳ. 終わりに

従来多くの人にとって、書評とは雑誌でなんとなく読んだり、新聞で一方的に選ばれたそれも当たり障りのないものを読む、というくらいの接し方しかしないものだった。書評は批評でなければならない、と考える人が批評家には少なくないことからもうかがえるように、書評誌は書評を批評とみなしたうえで、もっぱら文芸批評で成り立っているものが主流だが、これを愛読する人は当然社会における少数派である。これはよしあしの問題ではなく、文芸批評はそういうものであるし今後もそのように存在してゆくだろう。

本来書評とは、人がものを読んだときどうしてもそれについて語りたくなるというところから発するものである。書評家、批評家とは、読みたくない、書きたくない図書についてでもプロだから書評を書く人であり、一般読者は書きたくてたまらない図書についてだけ書評を書く人だということもできる。岡村は1979年に、“表現への志向を抱いている近代的読者がいかなる回路でメディアへと結実していくだろうか¹⁴⁾”、と述べたが、今日のインターネットは、従来著者でなく読者であるのみだった人々をして書く人へと可能ならしめた。玉石混合でごちゃごちゃの個々人の読書日記のようなものは別にしても、なによりもインターネット書店における読者書評は、読者たちが意見を言い合い、知りたいことを得る場を提供している。また、語りたくても語る場がなかった読者のもどかしさを解消するとか、ベスト1といわれる本を少しもよいと思わない自分を変なのかと思ったら、同じ意見が少なからずあって溜飲を下げる、といった共感の場を提供する。

現在読書について語り合う機会がなくなりつつあるのは、必ずしも人が図書を読まなくなったからではないと私は思う。むしろ図書を読む人の割合は昔より増えているはずであるし、新刊書の出版点数も毎年増え続けている。ただ、読む人が増えただけ、以前のように、教養的、思索的に読むとは限らない読み方の部分が膨らんだのではないだろうか。これは、それまで出版物にしか載らなかった図書の広告が電車の吊り革広告に出だしたり、“(映画を) 観てから読むか、読んでから観るか”という角川の宣伝コピーが出たりした頃から顕著になってきたことではないか。、ともかく読書について語ることでできる「知的共同体」は消滅しつつあるし、筋金入りの読書家でない人々が、多くのレジャーやレクリエーションのひとつとして読書をしようとしたとき、マニュアル的な読書案内やてっとりばよい紹介を必要としていることをただ嘆いてもはじまらない。また、本音をさらけ出すコミュニケーションが避けられること、現代において読書は以前にも増してプライベートな行為となっており、読書について語ることは精神の露出で

あり、読書の好みはその人のライフスタイルやファッションを反映するから、ある本を好きだというと特定のイメージを持たれる危険性があるので、人はよほど親しい相手でないとかつに図書の感想を口に出来ないのである。それが匿名ならもしかしたら周りの人からバカにされそうな本に感動したと本音を言うこともできる。

書誌コントロールにおける書評は、書誌データが網羅的に正確に提供され、実物あるいはそれに代わる情報が豊富に提示され、それに人々が容易にアクセスできる環境の上で、出来るだけ多様な情報が容易に得られ、選択の手がかりとなる、というプロセスにおいて、ひとつの役割をもち得ると考えられる。このプロセスが従来ばらばらであって一体化しにくかったのだが、コンピュータ技術の進歩によって技術的にはひとつのプロセスとしてアクセスできるようになりつつある。が、まだそれは発展途上のものであるし、現在この動きはもっぱら商品としての図書の流通販売促進のために進められている。これを過去の図書の蓄積も含めた書誌コントロール全体のなかでどのような形で確実なシステムとしていくかについてはこれからの課題である。

注

- 1) 坪内祐三「批評としての書評とボトラッチ的書評」『文学界』vol. 54, no. 7, 2000, p. 200-213. なお、この引用のものは、浦松佐美太郎「書評論」『朝日新聞』1950年2月16日朝刊4面。
- 2) 河井弘志「書評理論の展開(2)」『中部図書館学会誌』vol. 29, no. 1, 1987, p. 27.
- 3) 立花隆「僕はこんな本を読んできた」東京、文芸春秋、1995, p. 185-186.
- 4) 根本彰「情報基盤としての図書館」東京、勁草書房、2002, p. 69-70.
- 5) 『出版ニュース』2003年5月下旬号、日本書籍出版協会 (URL: Books.or.jp) .
- 6) 河井弘志「書評理論の展開(1)」『中部図書館学会誌』vol. 28, no. 1, 1986, p. 18.
- 7) 斎藤隆司「公共図書館での選書と書評について」『図書館雑誌』vol. 88, no. 9, 1994, p. 689.
- 8) 岡村敬二「書評論の系譜—皮膚感覚の豊饒へ」『新聞研究』no. 490, 1992, p. 52-55.
- 9) 田中紘太郎「書評の“ニュー・ジャムセッション”」『総合ジャーナリズム研究』vol. 25, no. 4, 1988, p. 66-72, p. 7-11.
- 10) 清水英夫「日本の書評：なぜ権威がないのか」『図書館雑誌』vol. 88, no. 9, 1994, p. 682. 香内三郎「書評紙をふりかえる(上)(下)」『エディター』no. 14, 15, 1975, p. 6-11, p. 7-11.
- 11) 岡村敬二「書評論覚え書き」『大阪府立中之島図書館紀要』no. 15, 1979, p. 26-42. 香内三郎「書評紙をふりかえる(上)(下)」『エディター』no. 14, 15, 1975, p. 6-11.
- 12) 小林矩子「アメリカの書評メディア—1992—」『武蔵野女子大学紀要』no. 28, 1993.
- 13) 『よむ』では1991年3月と1992年10月に多数の月刊誌、週刊誌の書評の膨大なデータの分析を行っているのが興味深い。
- 14) 岡村 前掲11), p. 33.

(本学教授)